

「読めた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント(1)

— 漢字単語の読み書きテストの妥当性に関する検討 —

○中知華穂¹ 竹村幸見² 銘苺実土² 成田まい³ 須藤史晴⁴ 小池敏英⁵ 緒方直彦⁶

(1 日本学術振興会) (2 東京学芸大学大学院) (3 NPO 法人スマイルプラネット) (24 世田谷区立砧小学校) (5 東京学芸大学教育学部) (6 東京都教育庁)

KEY WORDS: 読み書きスキル, アセスメント, 通常学級

【目的】

小池ら(2017)は、東京都教育庁の委託研究により児童一人ひとりの実態を把握し、指導・支援につなげる「読み書きアセスメント」の開発を行った。このアセスメントは、彌永ら(2017)、中村ら(2017)、Sato et al.(2017)、瀧元ら(2016)、Onda et al.(2015)、中ら(2014)が発表した基準値に基づき、ひらがな単語、漢字の読み書き、読解などを含めた多様な読み書きスキルの習得状況を把握できるものである。これらのスキルが重複して低成績を示す場合には、学習内容の習得を困難にすることが指摘されている。

「読み書きアセスメント」では、先行研究に基づき、各スキルテストの下位 10 パーセンタイル値を低成績としているが、この評価の妥当性について更に検討する必要がある。そこで、本研究では、漢字の読み書きテスト成績の妥当性について検討することを目的とした。

【方法】

1. 対象：東京都 X 区の通常学級に在籍する小学 2～6 年生 1414 名を対象とした。また、対象とした児童の学級担任 55 名に漢字の読み書き学習に関するアンケートを実施した。調査の協力と結果発表に関しては、小学校校長と保護者から同意を得た。

2. 調査課題と手続き：児童には、小池ら(2017)に基づき、漢字単語の読み書きテスト、ひらがな単語の流ちょうな読みテスト、聴覚記憶テストを実施した。2、3 年生はこれらのテストに加え特殊音節テストも行った。テストは、学級担任の指示に基づき一斉に実施した。また、学級担任には、漢字の読みまたは書きの習得の弱さの有無に関するアンケートを実施した。

【結果・考察】

1. 漢字学習の弱さの判断と漢字読み書きテスト成績との関係について：漢字読みテストの平均正答率(SD)は、各学年で 96.7～94.1(8.4～10.0)の範囲であった。漢字書きテストは、94.8～74.9(11.1～26.2)の範囲であった。学級担任より漢字の読みまたは書きの習得に弱さがあると判断された児童は、2～6 年生合わせて読みは 144 名、書きは 219 名であった。次に漢字読み書きテストの成績と学級担任による漢字の読み書き習得の弱さの判断との関係を ROC 分析により検討した。漢字読みテスト、書きテストの曲線下面積は、0.70 以上を示し中程度の予測能を認めた。学級担任による漢字学習に対する弱さの判断に基づくカットオフ値は、漢字読みテストで正答率 93.8 (15～20 パーセンタイル値)であった。漢字書きテストは、正答率 62.5～95.8 (下位 15～27 パーセンタイル値)の範囲を示した。以上の結果より、本研究の漢字読み書きテスト成績は、学級担任による漢字学習に対する弱さの判断と同程度の予測精度を認めたことから妥当性を指摘できる。

2. 学級担任による漢字習得の弱さの判断と読み書きスキルテスト成績の関係について：学級担任が、漢字習得に弱さがあると判断した児童について、低成績(下位 10 パーセンタイル以下)を示すスキルテスト(ひらがな単語の流ちょうな読、聴覚記憶、特殊音節)の個数と漢字単語の読み書きテスト成績の関係を検討した。Fig.1 はその結果を示して

いる。漢字読み、書きテスト共に全学年で、スキルテストの低成績が 0 個の時よりも 1 個以上ある場合、漢字書きテスト成績が低下する傾向を認めた。次に、低成績を示すスキルテストの個数(0～3 個)ごとに漢字習得に弱さがあると判断された児童の分布を検討した。その結果(Fig.2)低成績を示すスキルテストが 1 個以上ある者を漢字読み、書きテスト共に全体の 50～80%認めた。以上の結果から、担任教員が漢字習得に弱さがあると判断された児童においても、スキルテストの低成績により、漢字テストの低成績を生起させる可能性が示唆された。これより、下位 10 パーセンタイル値をスキルテストの低成績者評価の基準値として用いることの妥当性を指摘できる。

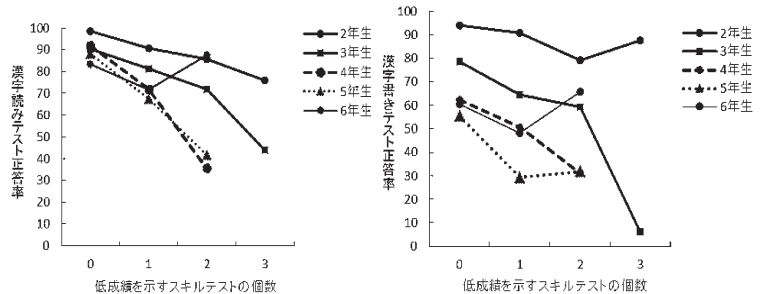


Fig.1 低成績を示すスキルテストの個数ごとの漢字読み(左)、漢字書き(右)テストの平均正答率

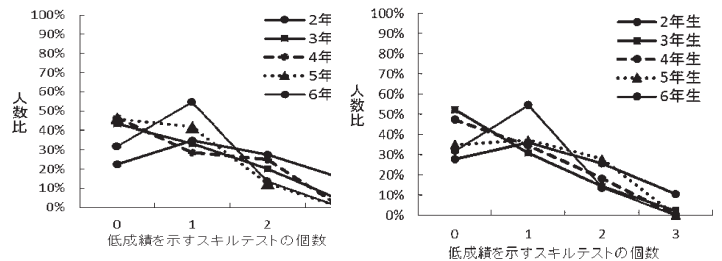


Fig.3 低成績を示すスキルテストの個数ごとの児童の分布(左：漢字読み、右：漢字書き)

【文献】

- 1) 彌永ら(2017)小学 1・2・3 年生における特殊表記習得の低成績の背景要因に関する研究.特殊教育学研究.55. (印刷中)
 - 2) 小池ら(2017)「読めた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント活用&支援マニュアル.東京都教育庁指導部特別支援教育指導課.3)中ら(2014)小学 2 年における漢字読字・書字困難のリスク要因に関する研究.特殊教育学研究.52,1-12.
 - 4) 中村ら(2017)小学 2～6 年生における漢字書字低成績の背景要因に関する研究.特殊教育学研究.55. (印刷中)
 - 5) Onda et al.(2015) Risk factors for kanji words-reading difficulty in Japanese elementary school children. Journal of Special Education Research, 3 (2), 23-34.
 - 6) Sato et al.(2017) Risk factors for difficulty in reading comprehension of multiple-paragraph expository text at third to sixth grade of Japanese elementary schools. Journal of Special Education Research, 5, 23-34.
 - 7) 瀧元ら(2016)学習障害児における改行ひらがな単語の音読特徴.特殊教育学研究.54,66-75.
- (NAKA Chikao, TAKEMURA Yukimi, MEKARU Mito, KOIKE Toshihide, NARITA Mai, SUTOH Fumiharuru, OGATA Naohiko)